

# 作曲のヒント

(六)



外山友子

(1)から(5)まで、ずっと、和声についてほんの基礎のことを、すこしかけ足でお話しましたので、何だかたいへんむずかしいことのように感じるかたもあるかもしれませんが、いろいろの用語や名称など、その意味がわかれば、何もむずかしい理くつではないのです。(5)までお読みくださったかたは、もう一度、(1)からお読みくださいますと、こんどは一層はつきりと意味がおわかりになると思いますので、是非練りかえしてごらんいただきたいと思います。

今月は、今までに出てきた用語や重要な名称を、一応まとめてみましょう。

先ず最初に出て来たのは三つの重要な音でした。

主音 $\parallel$ 長調ではド 短調ではラ

属音 $\parallel$  ソ

下属音 $\parallel$  ファ

さきの三つの音にそれぞれ和音を作って、主和音トニック(T)

属和音ドミナント(D) 下属和

音サブドミナント(S) が出来ま

す。この三種の和音を主要三和音といえます。

和音の音の重ね方に三つの

位置があること

(これは、主要三和音だけでなく、すべての和音にいえること)

ハ長調のドミソ(T)でいえば、

基本位置とは、根音が一番下の低音とな

ったときをいいます。

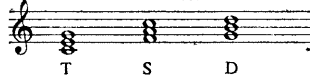
第一転位は第三音すなわち根音から数

えて三度上の音が低音となる。

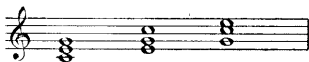
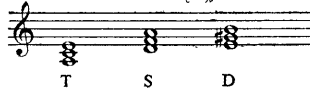
第二転位は、第五音すなわち根音から

数えて五度上の音が低音となる。

長調 (dur)



短調 (moll)



基本位置

第一転位

第二転位

曲の終り方に、一定の形があること（終止形）

正格終止 D-Tで終る。このDの中には、かならず第七度の音シがあつて（これを導音といいます）この音が主音へおさまります。

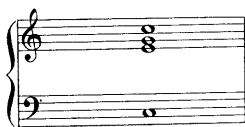
変格終止 S-Tで終る。

調が確立するには、このSDTがそろふことが必要で、この形を終止形といいます。

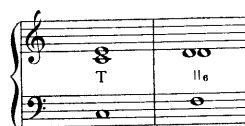
### 重複と省略

和声のひびきとしては、四声がいことは、前に申し上げた通りですが、この四声が、

三つの音を  
どのように  
重ねるかに  
よつて、あ



根音を重複



根音を重複して第五音を省略

る音は重なり、ある音ははぶかれることになります。これを重複といい、省略といいます。

### 長三和音と短三和音

両方とも、根音第五音の音程は完全五度ですが、根音第三音の音程が、長三度であれば長三和音、短三度であれば短三和音となります。

### 平行調

長調（D<sub>h</sub> ドゥアー）と短調

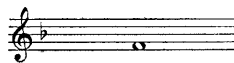
（d<sub>m</sub> モール）との関係ですが、

同じ調子記号、例えばりが一つの

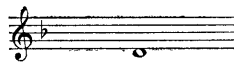
調子は、長調ではドが主音ですか

ら、へ調となり、短調では、ラが

主音ですから、ニ調となるわけです。このへ長調と、ニ短調との関係を平行調といいます。



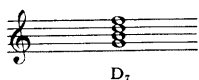
へ 長調 (F dur)



ニ 短調 (d moll)

### 属七（D<sub>7</sub>）の和音

属音の上に作られた四和音、例えば、下図のハ長調の、ソシレファの音をいいますがソから、一番上のファまでの音程が七度になりますので、普通の和音を属七といい、非常によく使われます。



D<sub>7</sub>

### 共通和音

一つの曲の中で、最初の調子が、途中で転調し

ていくことがあります。

例えば、ハ長調で進んできた曲が、

②の和音は、ドミソでTですが、この和音はまた、ト長調のファラド(S)とも考えられ、これが橋渡しとなつて、ト調へ転調していくのです。この②の和音を、共通和音といいます。

その他、和声の進み方をよくするた

めに、短音階は、ほとんど和声的短音階を用いておりますが、長調でも、和声的長音階といって、第六度の音、すなわち、ラが半音下げられて、全体にやわらかい感じになる音階を用いることがあります。これを *mollitur* モールドゥアー といいます。

まず、これだけのことを思い出して下されば、これから、もう少し話をすすめても、よくおわかりになると思います。

和音が同一の和音でも、音の重ね方で、いろいろの音の進み方が出来ますし、メロディに対して、どんな和音を、と和音のえらび方も、大体おわかりになったと思います。

※ ※ ※



ハ長調では T  
ト長調では S-D

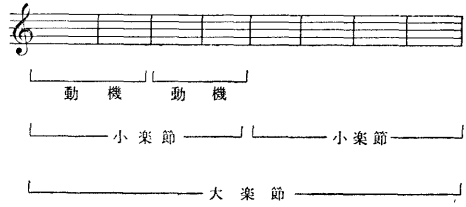
ただし、曲というものは、メロディがあつて和音がつけば、出来あがるというものではありません。

詩にも一定の形式があるように、音楽にも、声楽にしろ、器楽にしろ、昔から現代に至るまで、時代とともにいろいろの変遷はあるにしても、一定の形式というものはあるのです。この音楽の形式を、楽式といいます。

何でも、一つのを構成する場合、その部分部分が組みたられて、全体がまとまっています。音楽の場合も、その部分となる単位があり、その最小単位を、動機(モチーフ)といいます。この動機から始まって、主題が作られ、それを発展させて一つの曲にまとめる、これが作曲という仕事なのです。

### 動機

原則として、動機は、二小節から出来ています。例えば、「花」を発音しますと、「ハナ」となりますが、この「ハ」だけや、「ナ」だけでは、ことばになりません。「ハナ」と発音することによつて、「花」を連想することになります。この花という語が動機で、この花から、「美しい花」とか、「白い花が風にゆれて」とか、ことばをならべて詩が作られていくように、二小節の動機を、くりかえして、といつても、そのくりかえし方に、いろいろの方法がありますが、とにかく四小節となつて、これが小楽節となります。



この小楽節が、さらに二つ集まって、八小節となり、これが大楽節です。

さらに、この大楽節を二つ、これは内容的に共通な二つの大楽節ということになりますが、これを、**複合大楽節**といいます。

さて、この動機から発展した形式の、最も小さく完結したのが、**リード形式**です。

歌謡形式と訳されていますが、かならずしも、歌曲の形式に限られたものではなく、古典主義の音楽のほとんどすべてはこの形式とその応用で出来ています。文部省の教育用音楽用語では、「唱歌形式」また「リード形式」となっています。

この動機、小楽節、大楽節、複合大楽節から出来ているリード形式にも、その組み立てかたによって、次の四つに分けられます。

- A 一部形式
- B 二部形式
- C 三部形式
- D 複三部形式

動機がただ一つで、それを発展させて、一つの楽節、つまり八小節位で終る曲が、一部形式です。これは「幼稚園のための指導書」音楽リズム編の14頁に、歌唱の教材の点で、形式は一部形式を主とする、とありますが、この形式のことをいいます。同じ本の曲目をずっと見てまいりますと、

1 桜（これは六小節）、 2 ちょう ちょう、

21 砂山、 22 かけっこ、 25 菊の花、

27 ちゅうちゅうねずみ、 28 お正月

などは、みな八小節で、典型的の一部形式といえます。ただこの中には、1の桜のように、

三つの動機だけで出来てしまっているのがあります。これを小三部形式といって、短かい歌には、この形式のものがありません。

「たてた月が」という昔からの歌も、この小三部形式の典型的なものです。

「たてたつきが」が一つの動機、つぎの、「まあるい まあるい まんまるい」で一つ、「ぼーんのようなつきが」で一つ、このように小さな三つの部分から出来ている形式もあります。

